

# 四ツ塚遺跡

## 第4次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第110集

四ツ塚遺跡 第4次発掘調査報告書

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

2002

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

よ つ づか  
四 ツ 塚 遺 跡

第4次発掘調査報告書

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



1～4次調査出土の8世紀第4四半期から9世紀第1四半期の土器



1～4次調査出土の10世紀初頭の土器

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、四ツ塚遺跡の調査成果をまとめたものです。

四ツ塚遺跡は、山形県のほぼ中央に位置する西村山郡河北町に所在します。山形盆地の北端にあたるこの町は「紅花の里」として知られ、中心街である河北町谷地は、古くから最上紅花生産の中心地として栄えました。現在、町の平野部ではサクランボの栽培が盛んです。

この度、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴い、工事に先立って四ツ塚遺跡の第4次調査を実施しました。

調査では、古代の堅穴住居跡が2棟検出されたほか、2次調査と3次調査で検出された溝跡の延長部分を検出しました。また、縄文時代のものと考えられる陥穴も検出されました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木 村 宰

## 例　　言

- 1 本書は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に係る「四ツ塚遺跡」の第4次発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県健康福祉部障害福祉課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名 四ツ塚遺跡 遺跡番号 481  
所　在　地 山形県西村山郡河北町大字吉田字馬場164他  
調　査　主　体 財団法人山形県埋蔵文化財センター  
調　査　期　間 平成13年4月1日～平成14年3月31日  
現　地　調　査 平成13年5月14日～6月14日  
調　査　担　当　者 調　査　第　四　課　長 渋谷 孝雄  
　　　　　　　主任調査研究員 齊藤 主税  
　　　　　　　調　査　研　究　員 水戸部秀樹（調査主任）  
　　　　　　　調　　査　　員 渋谷 純子

- 4 発掘調査および本書を作成するにあたり、山形県健康福祉部障害福祉課、河北町教育委員会、村山教育事務所、山形県立救護施設みやま荘等関係機関にご協力いただいた。
- 5 本書の作成・執筆は、水戸部秀樹（II・III・IV・VI・VII章）、渋谷純子（I・V章）が担当した。編集は須賀井新人、佐竹弘嗣、竹田純子が担当し、全体については渋谷孝雄が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。  
　　遺構写真撮影 日本特殊撮影株式会社  
　　基準点測量・水準測量 株式会社寒河江測量設計事務所
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T…堅穴住居跡	S B…掘立柱建物跡	S K…土坑
S D…溝跡	S E…井戸跡	S P…ピット
S X…性格不明遺構	R P…登録土器	R Q…登録石器

2 遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書の執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を示す。
- (2) 遺構実測図は1/30～1/300の縮図で採録し、各々スケールを付した。
- (3) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。
- (4) 遺物実測図・拓本図は1/1～1/6で採録し、各挿図にスケールを付した。
- (5) 遺構実測図中の遺物実測図は、原則として1/8で採録した。
- (6) 遺物実測図中の土器について、土師器は断面白抜き、須恵器は黒ベタで表示した。
- (7) 遺物観察表中において、括弧内の数値は図上復元による推計値を示している。
- (8) 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に掲った。
- (9) 1次から3次調査の報告書に示された標高値は、誤認により実際の標高より2.75m高いことが4次調査で明らかとなつた。ここで訂正する。

## 目 次

I 調査の経緯	1
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概観	7
IV 遺構	9
V 遺物	19
VI 第4次発掘調査のまとめ	25
VII 四ツ塚遺跡の調査成果（第1～4次調査）	26
註	31
報告書抄録	32

## 表

表1 土器観察表	24
表2 石器・礫観察表	24

## 挿 図

第1図 調査区概要図	3
第2図 遺跡位置図	5
第3図 第4次調査区遺構実測図・基本層序柱状図	8
第4図 堅穴住居跡S T 1	10
第5図 堅穴住居跡S T 2	11
第6図 堅穴状遺構S T 6	12
第7図 掘立柱建物跡S B65	13
第8図 溝跡S D7・9、S K39	15
第9図 溝跡S D11	16
第10図 陥穴S K5・8・19	17
第11図 S K4、S P50、S K27、S P52	18
第12図 遺物実測図（1）	21
第13図 遺物実測図（2）	22
第14図 遺物実測図（3）	23
第15図 S T 1（4次）出土遺物	29
第16図 S T 2（4次）出土遺物	29
第17図 S T 6（4次）出土遺物	29
第18図 S T 365（2次）出土遺物	30
第19図 S T 22（3次）出土遺物	30

第20図	S T652（2次）出土遺物	30
第21図	S T658（1次）出土遺物	30
第22図	S D124（2次）出土遺物	30
第23図	四ツ塚遺跡遺構配置図	付図

## 図 版

卷頭図版	1～4次調査出土の8世紀第四半期からの9世紀第 1四半期の土器
	1～4調査出土の10世紀初頭の土器
図版1	四ツ塚遺跡調査区（1次～4次の空中写真を合成）
図版2	第4次調査区、S T 1
図版3	S T 2・6、S D 7・9、S K39
図版4	S D11、S K4・5・8・19・27、S P50・51・52
図版5	第4次調査区出土遺物（1）
図版6	第4次調査区出土遺物（2）
図版7	第4次調査区出土遺物（3）
図版8	1～3次調査の主要な遺構（1）
図版9	1～3次調査の主要な遺構（2）
図版10	1～3次調査の主要な遺物（1）
図版11	1～3次調査の主要な遺物（2）

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

今回の発掘調査は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴う第4次調査である。

四ツ塚遺跡は昭和53年山形県教育委員会発行の『山形県遺跡地図』にNo.481として登録されている。平成10年度から12年度にかけて1～3次調査が行われており、事業予定区域内の約9,500m<sup>2</sup>が調査されている。今年度の調査区は、これらの北西部にあたる区域である。

(第1図 調査区概要図参照)

調査にあたり、本調査に先駆けて平成13年4月18日に財団法人山形県埋蔵文化財センターが試掘調査を行い、3ヵ所の試掘トレンチから、竪穴住居跡や土坑などの遺構を検出した。これらの結果及び第1～3次調査の成果をもとに、関係機関による協議を行い、調査区を設定した。調査期間は5月14日から6月15日である。発掘調査に至るまでの協議等は以下の通りである。

山形県教育委員会と県埋蔵文化財センターで、埋蔵文化財発掘調査計画について協議。

第1次調査 平成10年1月23日 第2次調査 平成11年1月27日

第3次調査 平成12年1月20日 第4次調査 平成12年11月10日

県健康福祉部長より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「県救護施設みやま荘改築整備事業に伴う地区内の埋蔵文化財調査」の依頼。

第1次調査 平成10年3月12日 第2次調査 平成11年3月17日

第3次調査 平成12年3月1日 第4次調査 平成13年3月26日

県健康福祉部長と県埋蔵文化財センター理事長の間で「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結。

第1次調査 平成10年4月1日 第2次調査 平成11年4月1日

第3次調査 平成12年4月1日 第4次調査 平成13年4月1日

つぎにこれまでの3次にわたる調査の概要を記す。

#### 第1次調査

調査期間 平成10年5月11日～7月8日 調査面積 3,900m<sup>2</sup>

#### 第2次調査

調査期間 平成11年8月30日～11月5日 調査面積 3,600m<sup>2</sup>

#### 第3次調査

調査期間 平成12年6月26日～7月5日・10月4日～11月2日 調査面積 2,000m<sup>2</sup>

これらの発掘調査については、整理作業を終えており、調査成果を記した報告書<sup>(1)</sup>は既に刊行されている。今回の4次調査で山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴う緊急発掘調査はすべて終了することになる。

## 2 調査の経過と方法

平成13年4月24日、県救護施設みやま荘会議室において、四ツ塚遺跡第4次発掘調査事前打ち合わせ会を開催し、発掘調査に至る経過報告・調査機関・調査体制・調査の方法・安全対策等を確認した。以下に大まかな作業工程を列記する。

平成13年5月14日現地調査を開始。5月15日から同23日まで重機による表土除去を行った。これに併行して遺構検出を行い、さらにグリッド設定などの作業を行った。

これまで行われた1次から3次の調査では、それぞれ任意の方向軸でグリッドを設定しているが、4次調査では、遺跡の位置の記録、各次の調査区の位置関係などを正確に把握するため、平面直角座標系第X系のX軸・Y軸に沿った方向でグリッドを設定した。グリッドの間隔は2mとした。また、付図に収録した1次から4次までの調査区を併せた遺構配置図には、4次の調査で使用した座標値を記した。

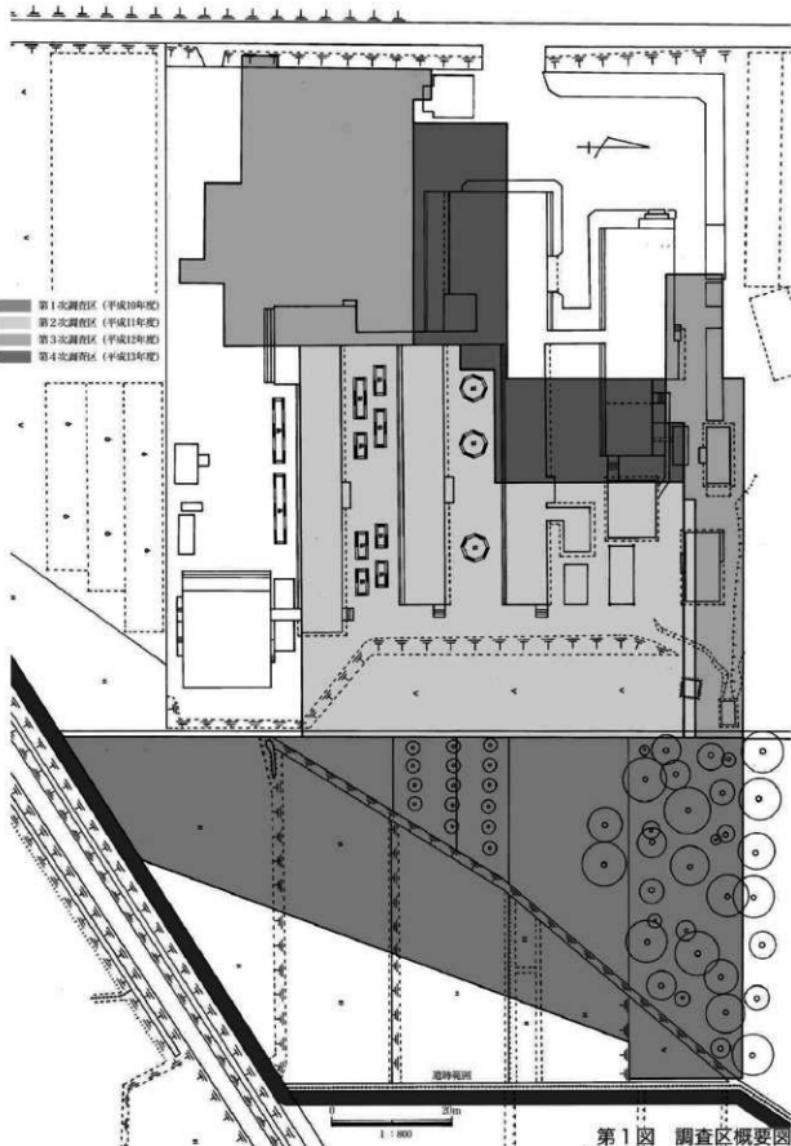
グリッドの名称とした数字は、西から東へ大きくなる数字と南から北へ大きくなる数字を、それぞれ座標値のY軸とX軸に沿わせた。その数字の組合せを、X軸とY軸の交点の第1象眼となる2m方眼のグリッド名とした。ただし、このグリッド名は4次調査にのみ適用される。

調査区は、旧みやま荘建設時の基礎工事のため、多くの部分が搅乱を受けていた。また、その旧みやま荘を解体する工事の際にも遺跡はさらに搅乱され、その面積の約54%が調査できない状態にあった。数ヶ所搅乱を取り除いたが、遺存している遺構は確認できなかつた。搅乱は深く、また面積も大きいため、すべてを取り除くことは行わなかつた。調査面積は1,500m<sup>2</sup>である。

その後、遺構検出、遺構精査、そして図面作成、写真撮影などの記録作業を進め、6月12日ラジコンヘリを用いた業務委託による空中写真撮影を行つた。遺物の取り上げは、遺構から出土したものは遺構とグリッドと層位により、遺構外から出土したものはグリッドと層位で出土地点の記録を行つた。6月14日には関係者を対象に発掘調査説明会を開催し、6月15日に予定通り調査を終了した。



作業風景 南から



## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

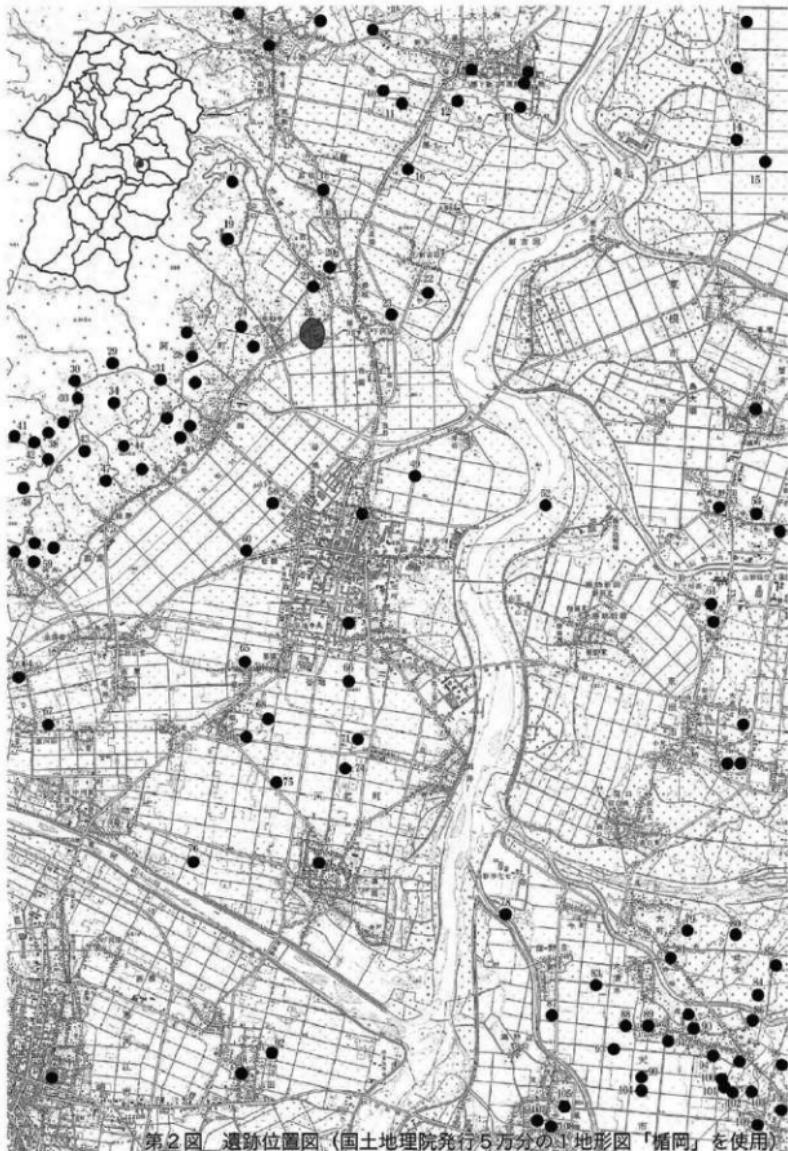
四ツ塚遺跡の所在している河北町は、山形県の中央、山形盆地の北西部に位置し、東は天童市・東根市、北は村山市、西と南は寒河江市に接している。

河北町の北西に位置する葉山火山の南東方を流下する水系には、法師川・滝ノ沢川・古佐川があり、耕地を潤しながら最上川に合流する。また、寒河江川が町の南縁を区切って西から東に流れ最上川に注ぎ、その最上川は東縁を区切って南から北に流れている。町の西側にある葉山山地の南東斜面（大久保段丘）が、南部でおおよそ100mから、北へ120m～130mの等高線を形成し、山地と平野部を区分する。平野部は、大半が寒河江川扇状地で、その東側には最上川の自然堤防や後背湿地、旧河道が、北東部には寒河江川扇状地前縁部が広がる。本遺跡は寒河江川扇状地前縁部と葉山南麓山地から続く大久保段丘の境界に位置している。この遺跡の多様な性格も異なる地形分類の境界に位置することに起因するものと考えられる。

### 2 歴史的環境

旧石器時代のものとしては、法師森・奥土入・根際山神などの遺跡がある。縄文時代の

番号	遺跡名	種別	時代	39	お月山	集落跡 縄文	75	一ノ坪	集落跡 古墳・奈良
1	中山	集落跡	縄文	40	桑ヶ原	包含地 縄文	76	不動木	集落跡 奈良・平安
2	中村A	集落跡	縄文	41	曲沢	包含地 縄文	77	演延城	城館跡 平安
3	中山B	集落跡	縄文	42	勇士入	包含地 旧石器・縄文	78	今町経壇	納経 江戸
4	河島八反	散布地	平安	43	根際山神	集落跡 旧石器・縄文	79	一ノ坪堂氏屋敷	城館跡 廉倉
5	湯瀬沢鉢	城館跡	中世	44	慶光寺山 A	集落跡 縄文	80	後藤原	集落跡 縄文
6	八反	集落跡	平安	45	中十人	集落跡 縄文	81	高野坊	寺院跡 廉倉～重町
7	大久保城	城館跡	中世	46	毘沙門山	集落跡 縄文・奈良	82	瓜小畠	集落跡 縄文
8	宝鏡寺	集落跡	縄文	47	根際山植	城館跡 中世	83	一案堀	堤壙 宝町
9	大久保宮城	城館跡	中世	48	さいかぢだ	集落跡 縄文	84	難野堂前	集落跡 縄文
10	高庭	集落跡	縄文	49	大塚堀	城館跡 中世	85	成生館	城館跡 南北朝～安土桃山
11	西前	集落跡	奈良	50	所岡	包含地 平安	86	合谷	製陶 縄文・疊食
12	春坂	集落跡	奈良	51	守地城	城館跡 中世	87	藏浦北 B	集落跡 平安
13	春の町	集落跡	平安	52	堤口館	城館跡 中世	88	の頭	集落跡 平安
14	長瀬木桶館	城館跡	中世	53	野田巖手刀	包含地 奈良・平安	89	成生薬師神社	納経 江戸
15	月山堂	集落跡	平安	54	野田中島	集落跡 縄文・平安	90	成生古墳群	古墳群 古墳
16	鶴沢	集落跡	縄文	55	野田巖手刀	出土地 奈良・平安	91	成生古錢出土地	古錢 宝町
17	岩木	散布地	縄文	56	出土地 I		92	新田橋	城館跡 中世
18	笛窓	包含地	縄文	57	内所 B		93	三桑坐里	坐里 奈良・平安
19	岩木鍵音	包含地	縄文	58	裏田	包含地 縄文・平安	94	城壁池 B	集落跡 平安
20	岩木 B	包含地	縄文	59	若宮八幡	包含地 縄文・平安	95	堆積池 A	集落跡 純文～弥生
21	岩木 A	包含地	縄文	60	若宮八幡	集落跡 奈良・平安	96	高木石鳥居跡	鳥居跡 宝町
22	伊達塚	城館跡	中世	61	三ツ屋	集落跡 縄文・平安	97	寒河江城	城館跡 中世
23	花ノ木	集落跡	縄文・弥生	62	三ツ屋東	集落跡 縄文	98	日田城の内	城館跡 中世
24	弥勒堂	包含地	平安	63	荒町	包含地 平安	99	清池清水	集落跡 古墳
25	山の神	包含地	縄文・平安	64	現介次郎屋敷	城館跡 中世	100	高木古錢出土地	古錢 宝町
26	四ツ塚	集落跡	縄文・奈良	65	下横	包含地 古墳			
27	弥勒寺延暦	経塲	室町	66	木山堂	集落跡 平安			
28	楳林	包含地	縄文	67	小泉磨	城館跡 中世	101	高木石田墳墓	塚墓 南北朝
29	長慶寺原	包含地	縄文・平安	68	中日中 B	包含地 平安	102	高木石田	集落跡 純文・平安
30	大久保 A	散布地	縄文・平安	69	羽入野原堂	集落跡 平安	103	高木原口	集落跡 古墳・平安
31	定林寺跡	寺院跡	中世・近世	70	翅中 A	包含地 平安	104	八反記田	集落跡 純文
32	法師森	包含地	旧石器・弥生	71	馬場	集落跡 古墳・奈良	105	蘿隈北 A	集落跡 緑倉
33	大久保 B	散布地	縄文	72	羽入野	城館跡 平安	106	北原	集落跡 平安
34	鶴袋間	包含地	縄文	73	羽入山森	集落跡 縄文・平安	107	蘿隈城	城館跡 室町～江戸
35	慶光寺下	包含地	縄文	74	熊野台	包含地 古墳・奈良	108	難波御寺護念経碑	納経 室町
36	磐沢尻	城館跡	中世				109	高木館	城館跡 安土桃山
37	土人 A	散布地	平安						
38	土人 B	散布地	縄文・平安						



遺跡は、前期は後沢・長慶寺原・奥土入、中期はお月山・慶光寺A・権現森など、後期は奥土入・長慶寺原、晩期は花ノ木<sup>(2)</sup>などがある。いずれも集落跡で、そのほとんどが平野部に臨む丘陵地と中小河川の河成段丘に位置している。弥生時代の遺物としては、花ノ木遺跡から弥生土器・石刀・石包丁・扁平片刃石斧などが出土している。

古墳時代以降の遺跡の多くは、平野部に広がっている。古墳時代の遺跡は、下槇<sup>(3)</sup>・熊野台<sup>(4)</sup>などがあり、奈良時代、平安時代の集落跡が熊野台・一の坪<sup>(5)</sup>・不動木<sup>(6)</sup>・月山堂<sup>(7)</sup>・馬場<sup>(8)</sup>・花ノ木等から発見されている。熊野台遺跡からは「大刀自」の籠書きのある須恵器の大甕が出土している。『延喜式』造酒司の項にある祭神九座の内に、「大邑の刀自」の記載があり、『小右記』永祚元年（989年）の項にも「大刀自、小刀自各一甕を献ずる」といった内容があることから、酒造用の壺と考えられている。<sup>(9)</sup>

一の坪遺跡からは「大山」、また「大山口（郷カ）」と墨書した須恵器坏が出土している。大山郷は古代律令制における出羽国最上郡の管下であったが、仁和2年（886年）11月に最上郡から分置された新設の郡である村山郡管下の六郷の一つとなった。『三代実録』には仁和3年（887年）5月に出羽守である坂上茂樹が、出羽郡井口地にあった国府を、最上郡大山郷保宝志野に移したいと、中央政府に申請したと記されている。この申請は許可されなかったが、移転先の候補地となる大山郷の所在地については、以前から問題とされており、一の坪遺跡出土の墨書き土器は問題解決の糸口となる重要な遺物である。大山郷の候補地とされる一の坪遺跡のある河北町は、申請時には、既に分置された村山郡に含まれると考えられる。しかし、村山郡が分置された後の最上郡には大山郷は存在しないことから、記事の前後関係に問題は残るが、移転申請のあった大山郷は旧最上郡管下の大山郷と考えても良いだろう。

東村山郡山辺町南部で検出された条里遺構は奈良時代に營まれたものと報告<sup>(10)</sup>されている。一方、河北町とは最上川を挟んで対岸に位置する東根市の北西部から村山市南部の一帯にかけても条里遺構が認められる。調査<sup>(11)</sup>によれば、平安時代の水路・畦畔が検出されている。新設された村山郡の郡衙は東根市郡山付近に推定されているが、この郡衙を中心とした山形盆地北部での条里制の施行と村山郡の分置は密接に関連し、条里水田の完成を前提として計画された可能性が強いと考えられている。<sup>(12)</sup>村山郡管下となった河北町の谷地・溝延の水田面に、広範な条里遺構の分布が確認されることも、この一連の動きの中で理解して良いだろう。

この河北町を含む西村山郡において、奈良時代から平安時代かけて營まれた窯跡としては、寒河江市の平野山古窯跡群<sup>(13)</sup>が挙げられる。河北町に隣接する寒河江市の西部丘陵に位置する平野山には、14ヶ所の窯跡や須恵器ないし瓦の散布地が確認されている。特に出土した瓦については、酒田市所在の国指定史跡で出羽国府とされる城輪柵跡に供給されたとする説があるが、賛否両論あり、未だに解決されていない。また、奈良時代から平安時代にかけて継続して營まれた窯跡として大量の須恵器が出土しており、四ツ塚遺跡で出土する須恵器もこの地で製作された可能性がある。

### III 遺跡の概観

#### 1 基本層序

四ツ塚遺跡の第4次調査の調査区は、遺跡範囲の北東部分である。遺跡の北東方向にある葉山山地から根際丘陵を経て、大久保段丘に至る緩い傾斜面に位置する。遺跡の中では最も標高の高い地点である。遺跡範囲の大半は現在は果樹園や畠地として利用されている。1次調査の北東部及び2次調査と3次調査の調査区はやはり大久保段丘上に位置しているが、1次調査の南西部は寒河江川扇状地の前縁部に位置し、周辺は水田として利用されている。最も標高の低い1次調査区では、地下水位が高いため井戸跡が比較的多くみられるが、逆に今回の中調査区では標高が高いこと、遺跡の北約200mには縄文時代中期の岩木A遺跡が存在することなどから縄文時代の遺構・遺物も期待された。

基本層序は第3図に示した。調査区の西辺、南辺は既に工事により調査区内より低くなっている。北辺の遺構検出面から上はすべて盛土である。基本層序は南辺から2ヶ所記録した。

a-a' の1層は搅乱で旧みやま荘解体時のコンクリートなどを多量に含んでいた。2層はコンクリートなどは見られなかつたが、土が攪拌されており、おそらく旧みやま荘建設時の整地等によるものと考えられる。3層以下が地山として認識した層である。遺構検出も1・2層を取り除いて、3層上面で行った。3層から10層は粘土質の土、以下が砂質の土である。地形の傾斜に沿うように北から南へ傾斜して堆積しており、二次的な移動によるものと判断できる。

b-b' の1層もやはり搅乱である。2層は均質な黒褐色シルトだが、特に遺物は包含していない。3層以下を地山とし、遺構検出も3層上面で行った。3層・4層の堆積状況は水平に近くなってきており、地形の傾斜が緩くなっていることを示している。

#### 2 遺構と遺物の分布

遺構・遺物とも1次調査区が最も豊富であり、次数を追うごとに減少している。1次調査区の段丘の縁辺部には遺構が多くみられ、その遺構群は西へと続くものと予想された。しかし、本来は西へ向かって標高が上がっていく地形を削平して平坦面を造成し、旧みやま荘を建設したため、遺構は西へ行くほど希薄になる。遺物も同様で、4次にわたる調査で出土した遺物の総量は整理箱で26箱である。

4次調査では竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、溝跡、陥穴、土坑、ピットが検出された。特に溝跡SD7は2次調査区の溝跡SD123と3次調査区のSD98を繋ぐものである。遺物はほとんどが竪穴住居跡と竪穴状遺構から出土した奈良時代から平安時代の須恵器・土師器である。縄文時代のものと考えられる石器も若干出土したが、縄文時代の遺構に伴うものではなく、古代の遺構の覆土に混じったものと、搅乱から出土したものであった。



第3図 第4次調査区遺構実測図・基本層序柱状図

## IV 遺構

### 1 竪穴住居跡

#### S T 1 (第4図)

41-30グリッド付近に位置する。東西3.8m、南側を大きく攪乱されており、南北の現存長は1.4mである。カマドと煙道は北壁中央部に設けられている。煙道も削平を受け、全長は不明だが現存長で0.6m残る。柱穴など、他の施設は見られなかった。主軸方向はN7°W(北で西に7°振れる、以下このように略す)である。図示した平面図は床面上での検出状況である。断面図からは、竪穴の掘形は、壁際が一段深く、17~22層を埋め土としている状況が確認できる。その上に16層の貼床土が見られる。

カマドは11~15層で構築される。内部は長軸70cm、短軸60cmの範囲で被熱している。カマド中央には石製の支脚28が据え付けられており、やはり周囲を強く被熱している。

出土した遺物は少ないが、床面からは長胴甕18・19・22が出土した。他にカマド周辺で30・31・32などの擦痕をもつ石器が出土している。

#### S T 2 (第5図)

45-32グリッド付近に位置する。遺存していた部分の現存長は東西3.5m、南北0.8mのみである。重複する柱穴S P52より新しい。カマドは南壁の西よりに設けられている。他の施設は確認できなかった。主軸方向はN15°Wである。1~5層はS T 2を切る遺構、竪穴の西半分は地山上を床とし、地形の低い東半部に貼床土12・13層が見られた。12層はカマドが上に構築されていたため被熱している。

カマドは9~11層で構築され、内部は直径40cmの範囲で被熱している。

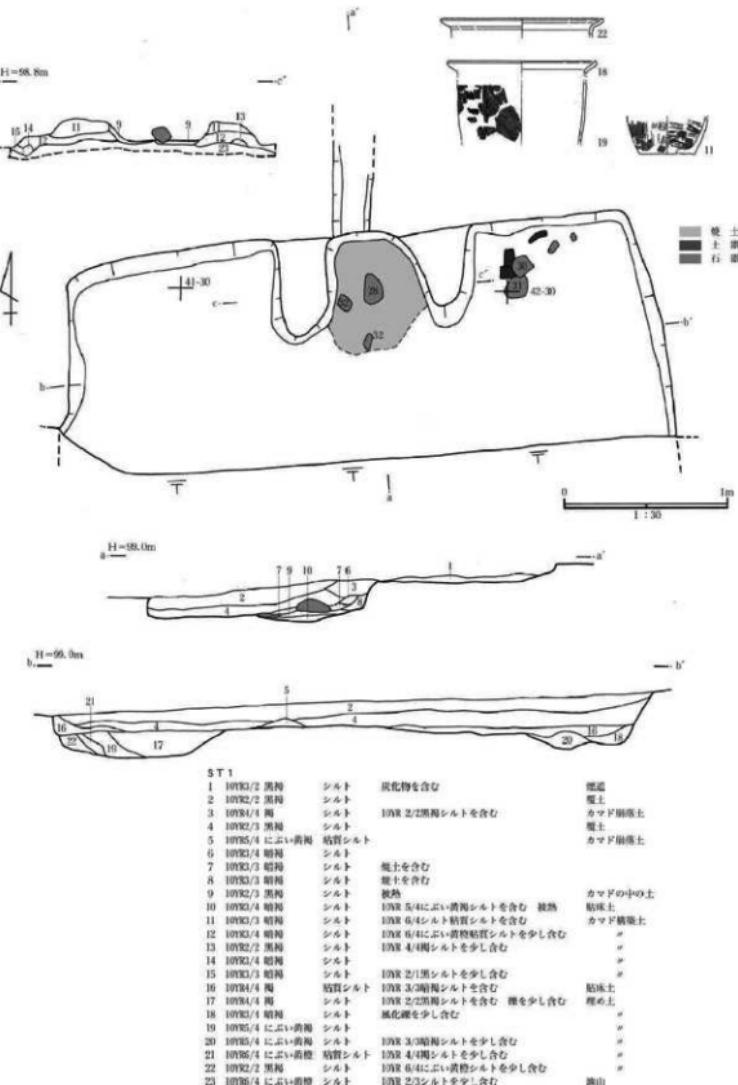
遺物は底部切離し技法か回転ヘラ切り技法の須恵器坏、土師器甕を中心に出土した。他にカマドの構築材とも考えられる擦痕をもつ石製品29がカマド周辺から出土した。床面からは須恵器甕8・土師器甕17が出土した。

### 2 竪穴状遺構

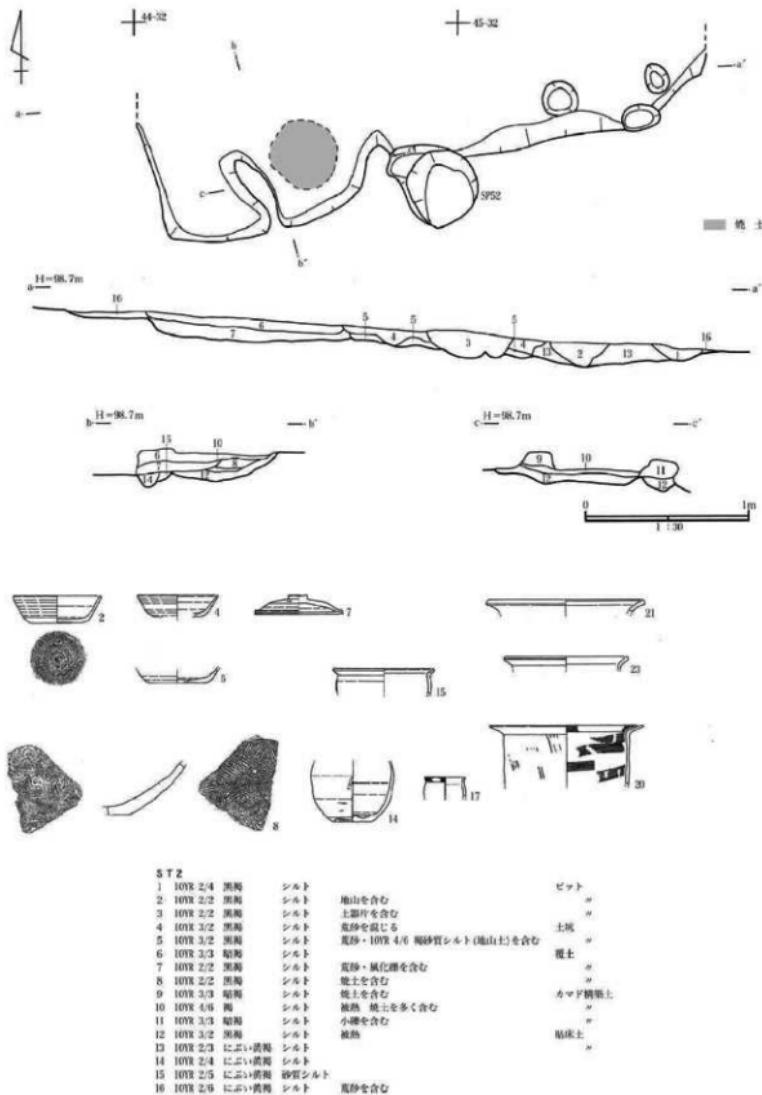
#### S T 6 (第6図)

竪穴住居跡とは異なり、カマドなどの施設を持たず、住居とは考えられないものを竪穴状遺構とした。今回の調査ではS T 6の1基のみ検出した。44-30グリッド付近に位置する。南北2.1m、東西2.2mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN18°Wである。内部にカマドや柱穴などの施設は持たない。1~5層が覆土で、6層の平坦な面が貼床土と考えられる。平面図では床面上の検出状況を図示した。

遺物は、底部切離し技法か回転ヘラ切り技法による須恵器の坏・高台付坏などが出土し、特に須恵器坏3は床面から出土している。他に土師器甕などが出土した。

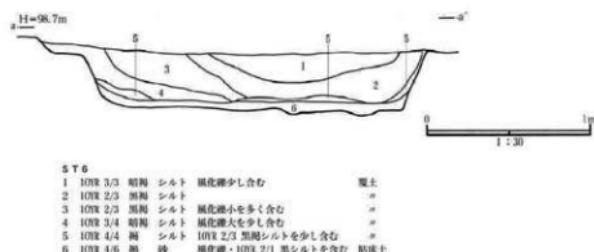
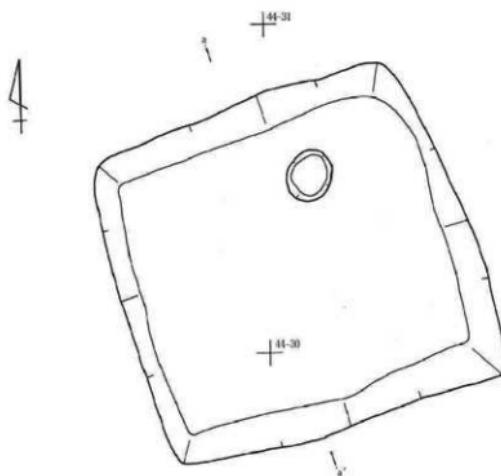
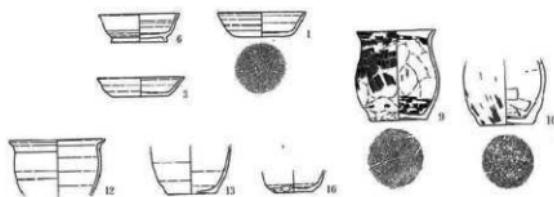


第4図 堅穴住居跡S.T.1



第5図 積穴住居跡 ST 2

遺構

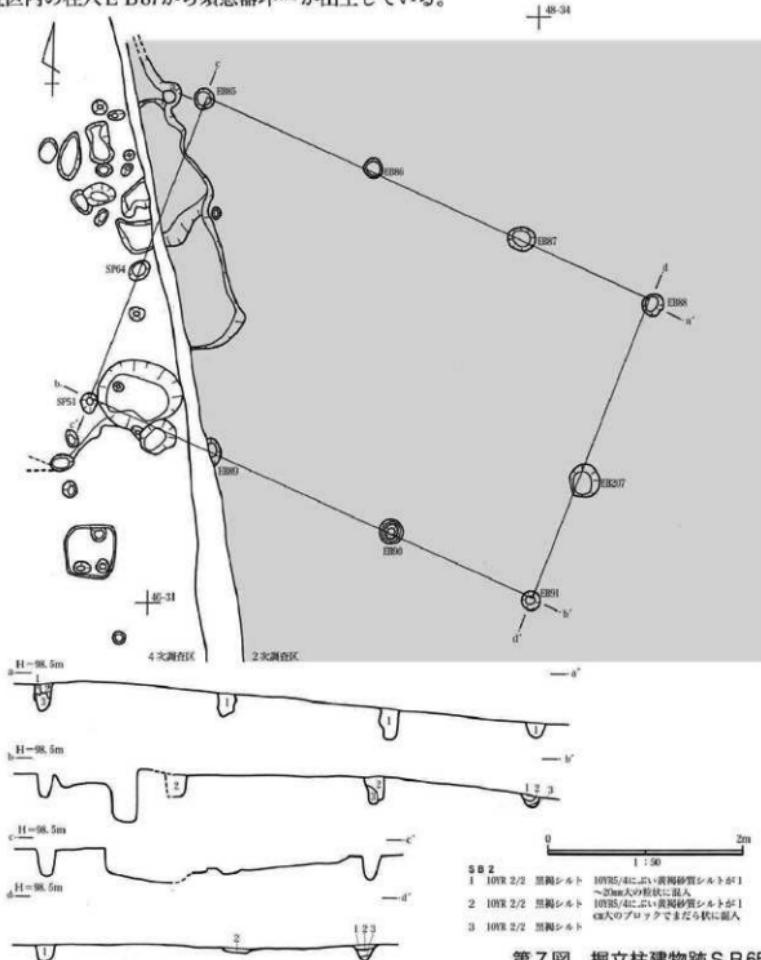


第6図 積穴状遺構S T 6

### 3 掘立柱建物跡

#### S B 65 (第7図)

45-32グリッドに位置する。4次調査区内では柱穴S P51・64の2基が検出され、2次調査区内のS B 2の柱穴と組む。梁間2間、桁行3間の掘立柱建物跡である。主軸方位はN64° Wである。直径21~34cmの柱穴からなる。底面の標高は97.8~98.15mである。遺物は2次調査区内の柱穴E B87から須恵器環<sup>(14)</sup>が出土している。



第7図 掘立柱建物跡 S B 65

### 3 溝跡

#### S D 7・9・S K 39 (第8図)

28-19~33-20グリッドに位置する。幅100~135cmの東西から南北方向に屈曲する溝跡である。S D 7は、東側の2次調査区のS DI23と、南側に隣接する3次調査区のS D98と繋がることが確認され、同一の溝跡であることが分った。(第23図 四ツ塚遺跡遺構配置図参照)

S D 9は2次調査区のS D362と同一のものと見られるが、4次調査区の中に溝の端があり、S D 7のように3次調査区には続かない。両者は重複しているが、S D 9が古く、S D 7が新しいことが、断面図e-e'で確認された。

また、S K39もS D 7に切られている。S K39は南北130cm、東西60cmの土坑である。

S D 7・9とも覆土は水成堆積ではなく、周辺の地山土を含みながら堆積した黒褐、暗褐のシルトが主体である。

出土した遺物は少なく、S D 7・S K39から土師器片が数点のみで、S D 9からは出土していない。

#### S D 11 (第9図)

25-24~30-21グリッドに位置する。幅40~65cmの溝跡である。攪乱により分断されており、部分的に検出された。主軸の方位はN65°Wである。溝跡の底面は周辺の地形の通りに、北西から南東に向かって下がっている。他年度の調査区にS D11と繋がる遺構は見られない。出土遺物は無い。

### 4 陥穴 (第10図)

陥穴は3基検出された。張り出した段丘の形、等高線に沿うように並んで配置されている。S K 8とS K 19の間では、攪乱のため検出されなかつたが、S K 19とS K 8の間隔から推察すると1基あるいは2基存在した可能性は高い。3基とも出土遺物は無い。

#### S K 5

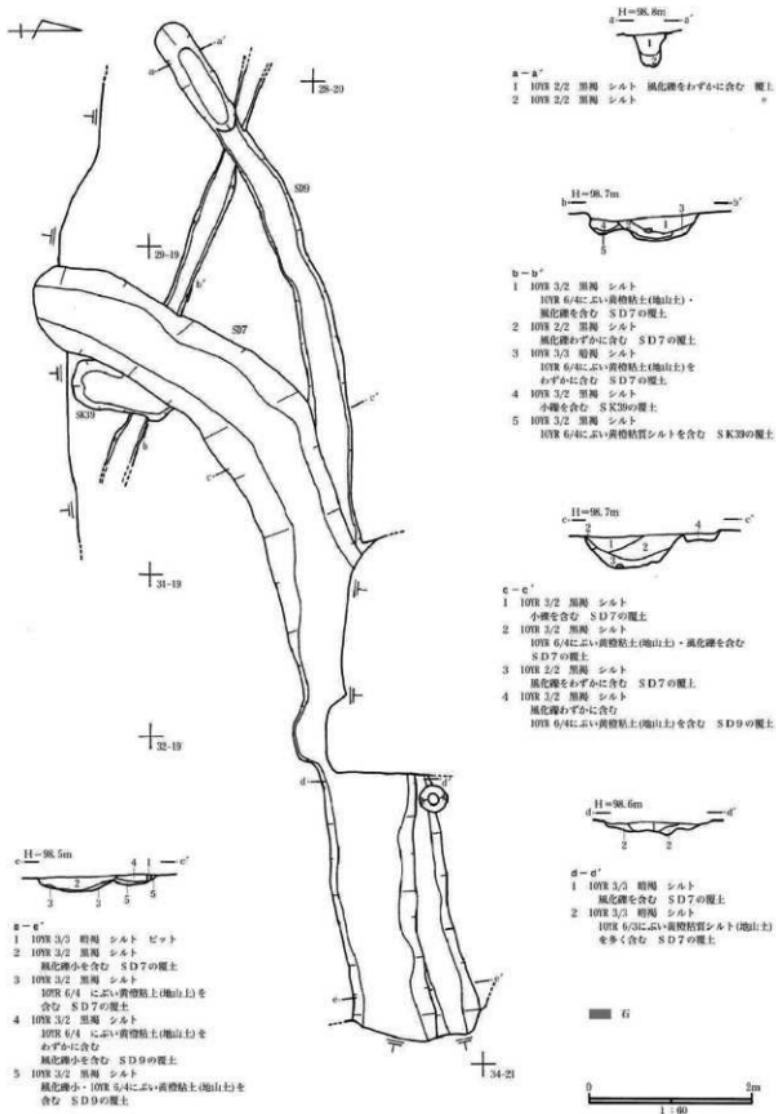
43-31グリッドに位置する。平面形はやや東西に長い円形を呈するが、断面の観察から、東側の壁の崩落によるものと考えられる。底面中央には逆茂木を立てたと考えられるビットが検出された。

#### S K 8

33-19グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面中央には逆茂木を立てたと考えられるビットが検出された。4層は地山に似ており、壁の崩落土であろう。

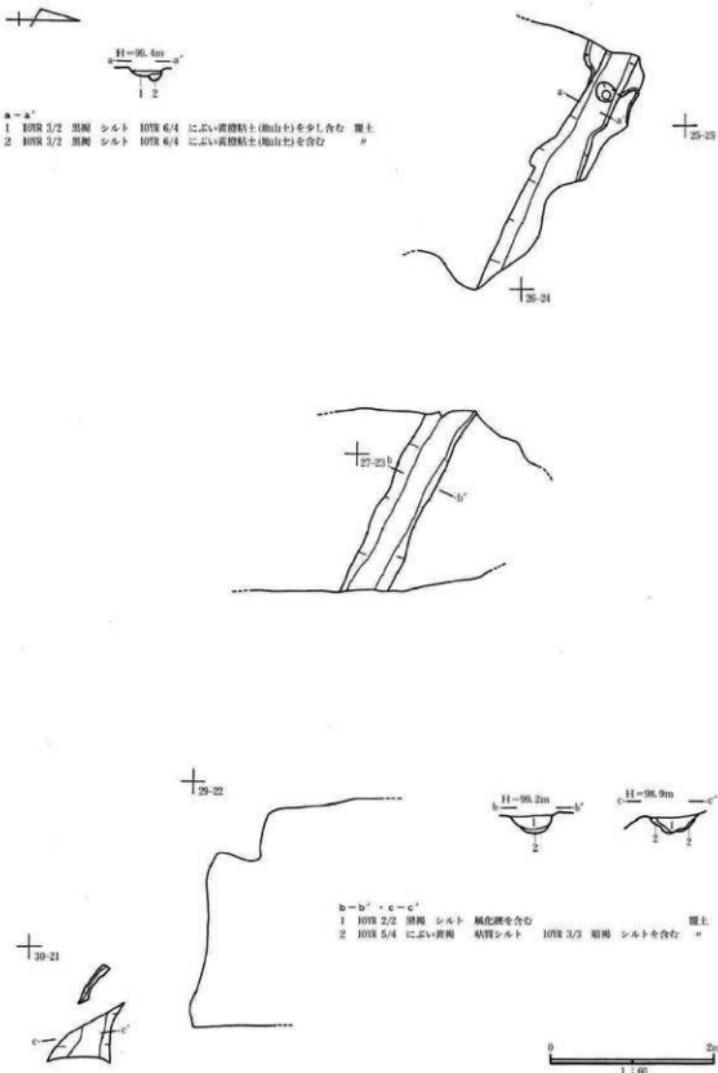
#### S K 19

37-22グリッドに位置する。平面形は円形、底面中央に逆茂木を立てたと考えられるビットが検出された。3層が壁の崩落土である。

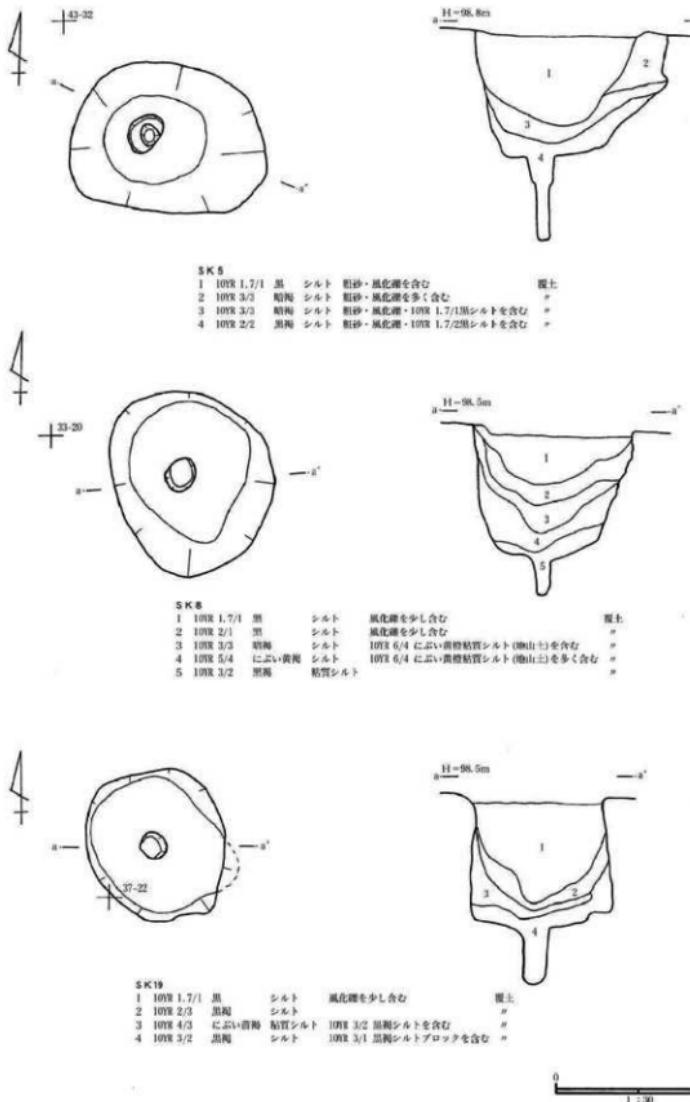


第8図 溝跡SD 7・9、SK 39

造構



第9図 溝跡S D11



第10図 陥穴SK 5・8・19

## 5 その他の遺構 (第11図)

## SK 4・SP 50

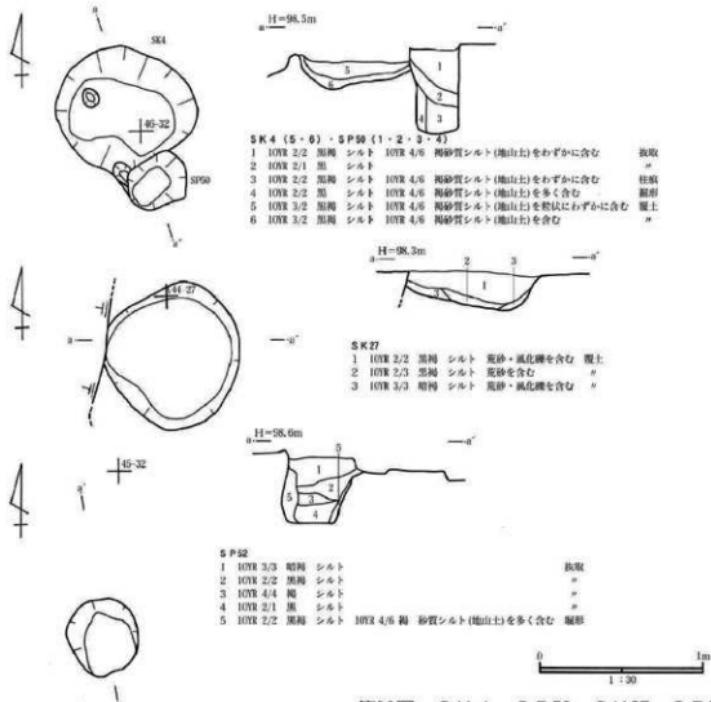
S K 4 と S P 50が重複している。切り合い関係では S K 4 が古い。S K 4 は直径90cm、深さ18cmの円形の浅い土坑である。S P 50は直径40cm、底面の標高が98.14m。断面から柱穴であると判断される。組み合う柱穴は S P 52が考えられるが、他にはなく2基のみであり、どのような建物を構成するか不明である。両者とも出土遺物は無い。

## SK 27

直径90cm、深さ22cmの浅い土坑である。出土遺物は無く、性格・時期とも不明であるが、形状は S K 4 と同様であり、関連する遺構であろう。

## SP 52

直径47cm、底面の標高が98.1mの柱穴である。S T 2 と重複しているが、S P 52が古い。形状、底面の標高から、S P 50と組み合うものと考えられる。S P 52と S P 50の間隔は心々で2.2mである。



第11図 SK 4、SP 50、SK 27、SP 52

## V 遺物

今年度の四ツ塚遺跡第4次調査で出土した遺物は、整理箱で5箱である。ほとんどが竪穴住居跡S T 2と竪穴状造構S T 6に伴う遺物であり、その他の地点から出土しているものはごく僅かである。調査区面積の54.1%が搅乱されていることもあり、全体の遺物点数は非常に少ない。出土遺物の主体は須恵器・土師器などの土器である。

### 1 須恵器（第12図）

今回出土した須恵器には、壺・高台付壺・蓋・甕などがある。1・3・6が竪穴状造構S T 6の覆土中から、2・4・5・7・8が竪穴住居跡S T 2から出土している。

壺は破片を含め、9点出土しており、このうち1～5の5点について図化した。底部の切り離し技法は、底部の確認できる4点すべて回転ヘラ切り技法によるものである。切り離し後の底部にはナデ調整を施している。1は、底径が大きく、逆台形を呈する。2は、ロクロ目が強く残るが、底部周縁の調整などを含め1に近い形状である。3は焼成が悪く、内面、外面ともに表面が剥離している。二次的に被熱している可能性がある。4は立ち上がり付近から口縁部にかけての破片で、底部を欠く。5は底部から立ち上がり部分にかけての破片である。底部切り離し技法は回転ヘラ切り技法である。底部の切り離し後は他と同様にナデ調整が施されていると考えられる。

高台付壺6はS T 6から出土している。底部切り離し技法は回転ヘラ切り技法で、底径が大きく、逆台形を呈する。法量がやや小さいものの、1に近い形状を持つ。

蓋は7がS T 2から出土している。天井部周縁に回転ヘラ削りが施される。器高がやや高く、天井部と体部の境が不明瞭で口縁部端が屈曲する。

甕は8がS T 2から出土している。底部から体部にかけての破片で、外面に平行タタキ、内面に同心円状の打圧調整痕がみられる。本来は丸底の甕であったと考えられる。

### 2 土師器（第12・13図）

土師器は、ロクロ成形のものと非ロクロ成形のものがある。県内では須恵器の製作技法の系譜を引く、ロクロ成形の土師器を「赤焼土器」「赤焼き土器」「あかやき土器」などとして区別することが多いが、本報告においては、これらの土器を土師器の一類型とし、遺物観察表の備考欄に「赤焼土器」と表記する。

土師器は甕・壺などの器種が出土している。土師器は比較的出土量が多く、4次調査の出土遺物の主体をなす。溝跡・土坑などからの出土も見られるが、主に竪穴住居跡S T 1・2、竪穴状造構S T 6から出土している。

甕は煮炊具と考えられる小型甕や長胴甕が多く、大型の甕の破片も1点出土している。小型甕は非ロクロ成形のものを3点、ロクロ成形のものを6点図化した。非ロクロ成形のものは9～11で、9・10は竪穴状造構S T 6から、11は竪穴住居跡S T 1から出土した。9以

外は下半部の破片のため、全体を知ることができないが、底径や体部の立ち上がりは近似している。下半部が被熱しており、煮炊具と考えられる。9・10は底部に木葉痕が残る。11は長胴甕の破片が出土した近辺から出土しており、長胴甕の底部とも考えられる。12～17はロクロ成形で、比較的小型のものも見られる。12・13・16は竪穴状遺構S T 6から、14・15・17は竪穴住居跡S T 2からの出土である。12・13については同一個体の可能性がある。12～15は二次的な被熱が見られ、煮炊具と考えられる。また、14は底部に粘土紐の巻上げ痕が残る。また、底部切り離し技法はヘラ切り技法である。16もヘラ切り技法で、体部立ち上がり付近にヘラ削りが見られる。

長胴甕は、竪穴住居跡S T 1・2からの出土である。全体が復元されるものはない。18～20は非ロクロ成形と考えられる。5点を図化した。18・19・22が竪穴住居跡S T 1から、20・21・23が竪穴住居跡S T 2から出土している。18・19は同一個体と考えられる。口縁部は上端をつまみ出す。胴部の外面には縦方向のハケメが、内面にはナデ調整が見られる。20は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は薄手で、つまみ出しがない。内面は横方向のハケメで調整されているが、外面は状態が悪く、縦方向のハケメの痕跡が僅かに残るのみである。21～23は口縁部のみの破片である。21は口縁部の上下端が、22～23は口縁部の上端がつまみ出されている。

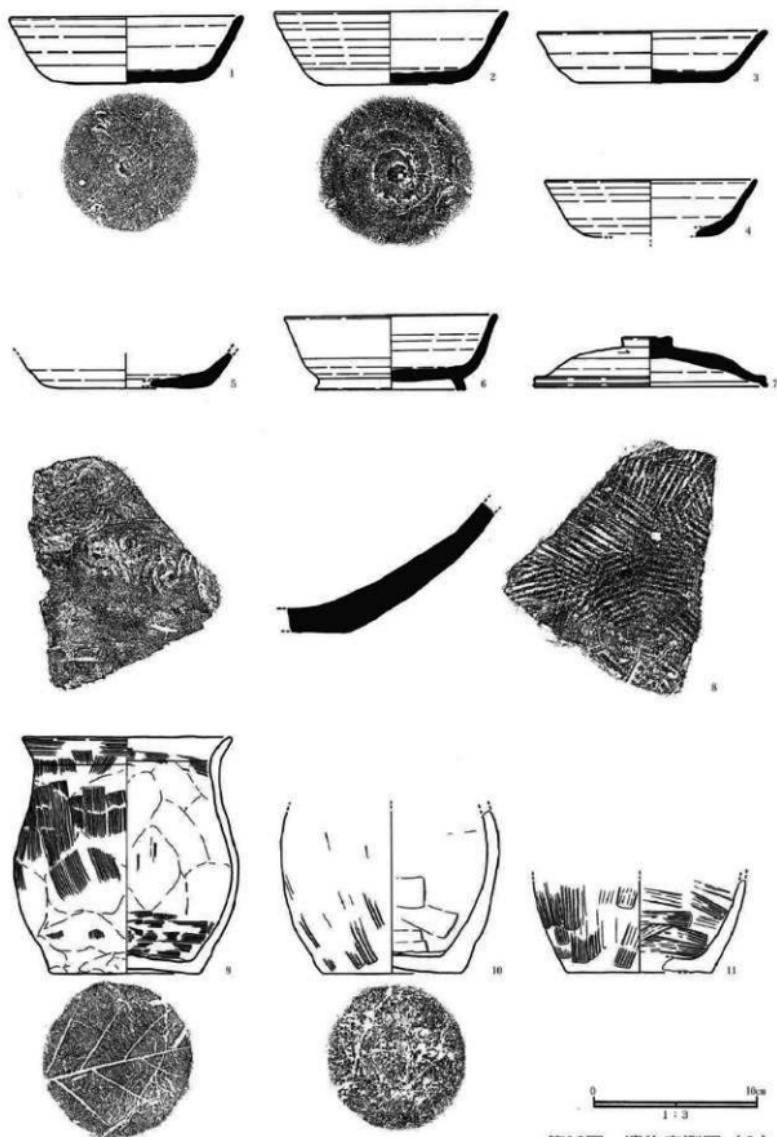
杯はすべてロクロ成形で、24～27の4点を図化した。これらはすべて攪乱から出土している。24・25は体部のみの破片であるが、体部立ち上がりから、底径が小さく直線的に外反する形状であると考えられる。26・27は下半部のみの破片である。底部切り離し技法は回転糸切り技法で、底部調整は見られない。

### 3 その他（第14図）

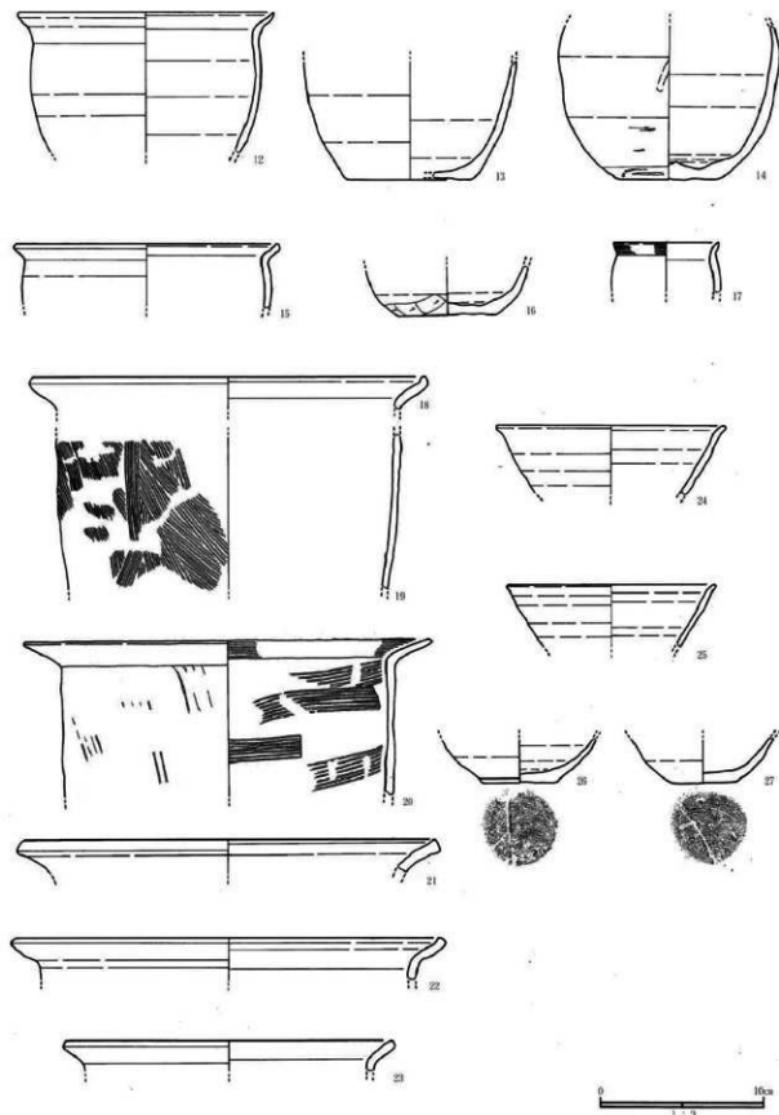
竪穴住居跡S T 1・2の、カマド内及びカマド周辺から出土した礫28・29・30・31・32及び、表面採集や攪乱出土の磨石や、竪穴住居跡S T 2の覆土に混入していた34・35などである。

28は、竪穴住居跡S T 1 カマド内の中央から検出された。全体に被熱しており、支脚として使用されたと考えられる。29は竪穴住居跡S T 2 のカマド内から出土した。支脚とも考えられるが被熱の痕跡が明確ではなく、壁際から立った状態で検出されたことから、カマドの構築材とも考えられる。上端側に磨痕が見られる。30・31は竪穴住居跡S T 1 のカマドの東側から出土した。形状は扁平で、表面には磨痕がある。また、竪穴住居跡S T 1 のカマド内から、割れた状態で出土した32や、これらよりも小型であるが、竪穴住居跡S T 2 のカマド覆土内から出土したものにも同様に磨痕が見られる。

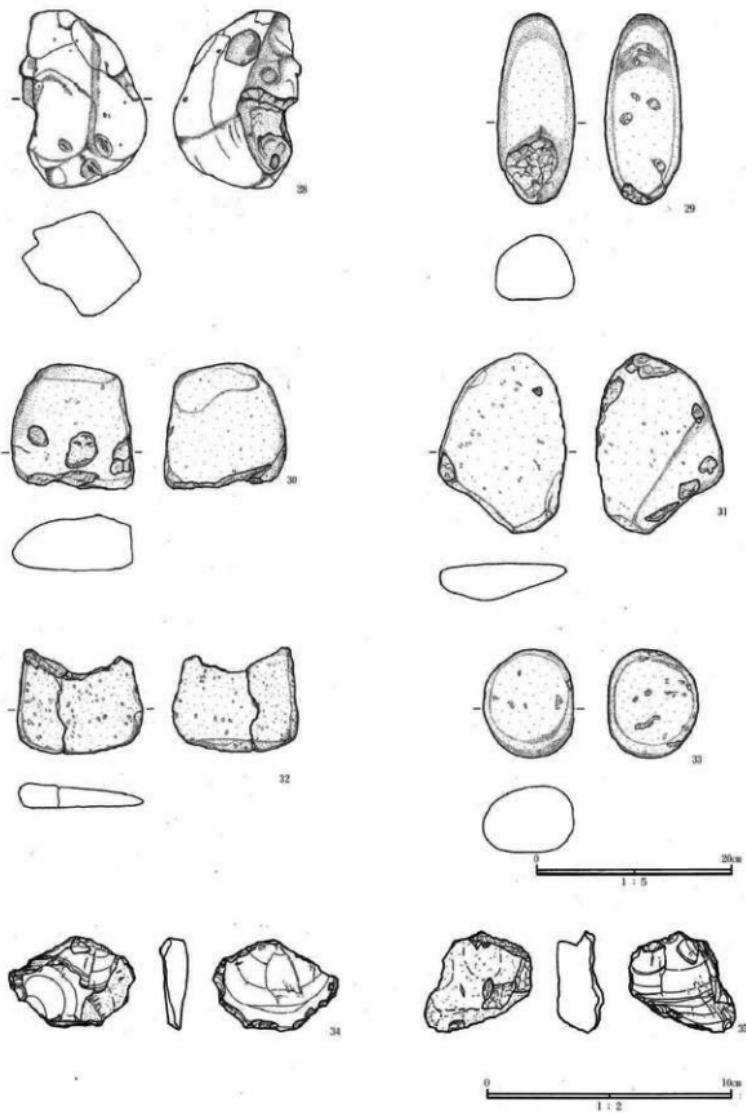
縄文時代の石器は頁岩製の剥片34・35や、磨石33が出土した。34・35はS T 2 の覆土に混入したもの、33は表採によるものである。



第12図 遺物実測図(1)



第13図 遺物実測図 (2)



第14図 遺物実測図（3）

表1 土器観察表

査定 番号	器種	形	出土 場所	寸法 (mm)			成形	胎土	焼成	色調	備考	登録 番号	
				口径	底径	高さ							
1		ST6 F 44-26G	144 88 40 7	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	砂粒少 海綿骨片や多	やや軟質	灰白色			2	
2		ST2 F 44-32G	143 90 45 5	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	細砂含	やや軟質	灰褐色			9	
3	環状器 环	ST6 Y 44-36G	140 90 31 6			回転ヘラ切	粗砂少	非常に軟質	赤褐色	内外面とも調離がひどい		4	
4		ST2 (130)		ロクロ	ロクロ		細砂極少	軟質	灰白色			26	
5		ST2 F 44-31G	(90)	6	ロクロ	ロクロ	粗砂極少	軟質	灰白色			30	
6	網状器 置付	高台 ST6 F 44-36G	130 92 46 7	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	砂粒多	硬質	灰色			1	
7	網状器 置	ST2 44-31G	143 31	ロクロケズリ	ロクロ		砂粒多	硬質	灰色			18	
8	網状器 挑	ST2 Y 44-31G		12	平行タタキ	アテ	砂粒含	良	灰白色			17	
9		ST6 F 44-29G	(120) 90 145 6	ハケメ	指押立 ハケメ	木漬痕	砂粒少	良	褐色			7	
10		ST6 F 44-36G	85	10	ハケメ	ヘラナダ	木漬痕	砂粒や多	やや軟質	赤褐色		6	
11		ST1 Y 42-36G	(90)	8	ハケメ	ハケメ	粗砂多	良	褐色			15	
12		ST6 F 44-26G	(156)	4	ロクロ	ロクロ	粗砂含	やや軟質	褐色	赤燒土器	内外面とも 調離がひどい	8	
13		ST6 F 44-29G	(70)	8			粗砂含	やや軟質	褐色	赤燒土器	内外面とも 調離がひどい	8	
14		ST2 44-31G	60	7			粗砂少	軟質	浅黃褐色	赤燒土器	底面に輪積痕	10	
15		ST2 44-31G	(160)	4			粗砂少	やや軟質	褐色	赤燒土器	内外面とも 調離がひどい	27	
16	土師器 壺	ST6 F 44-36G	(60)	5	ヘラケズリ	回転ヘラ切	粗砂多	良	褐色	赤燒土器		32	
17		ST2 Y 44-31G	(65)	4	ヨコナデ		砂粒含	良	褐色	赤燒土器		29	
18		ST1 Y 41-26G	(120)	5.5	ヨコナデ		砂粒多	良	黃褐色			15	
19		ST1 Y 42-29G	5	ハケメ			砂粒多	良	黃褐色			15	
20		ST2 F 44-31G	(248)	5	ハケメ	ハケメ	砂粒極少	やや軟質	黃褐色			33	
21		ST2 44-31G	(260)	7			砂粒や多	良	橙色			24	
22		ST1 Y 41-26G	(260)	5			粗砂少	やや軟質	黃褐色			31	
23		ST2 F 44-31G	(200)	5			細砂極少	やや軟質	黃褐色			28	
24		25-256 覆瓦	140	4	ロクロ	ロクロ	砂粒少	良	橙色	赤燒土器		21	
25		25-256 覆瓦	(125)	3	ロクロ	ロクロ	砂粒少	良	橙色	赤燒土器		20	
26	土師器 环	25-256 覆瓦	45	4	ロクロ	ロクロ	回転余切	砂粒少	良	橙色	赤燒土器		19
27		25-256 覆瓦	44	5			回転余切	砂粒や多	良	褐色	赤燒土器		37

表2 石器・礫観察表

査定 番号	種別	器種	出土場所	計測値 (mm · g)			石材	備考	登録 番号
				長さ	幅	厚さ			
28		ST1 41-30G	181 128 105 2645				板然	支脚として使用	16
29		ST2 44-31G	193 79 65 1224.5				板然あり		34
30	種	ST1 42-30G	128 124 56 1424.4				板痕あり		11
31		ST1 42-30G	183 129 37 1108.7				板痕あり		12
32		ST1 41-30G	106 128 25 434.2				板痕あり		13・14
33	石器	磨石 表模	111 92 68 986				板痕あり		38
34	石器	剥片 ST2	37 51 12 18.2	頁岩			縁辺に二次加工痕あり		35
35		ST2	41 44 19 35.7	頁岩			縁辺に二次加工痕あり		36

## VI 第4次発掘調査のまとめ

次章で平成10年度から13年度の4回にわたる発掘調査のまとめを述べるので、ここでは4次調査のみの成果を報告する。

今回の第4次発掘調査もこれまでと同じく、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に係るものである。4次調査は調査面積1,500m<sup>2</sup>。4回の調査で四ツ塚遺跡の推定面積約70,000m<sup>2</sup>のうち、11,000m<sup>2</sup>が調査された。

検出された遺構は竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・溝跡・陥穴・土坑・柱穴・ピットである。調査面積の54.1%が攪乱されており、遺存状態は悪い。

竪穴状遺構S T 6の床面から須恵器壺3が完形で出土している。底部切り離し技法は回転ヘラ切り技法であり、その後ナデ調整している。「山形の古代土器編年」(阿部明彦・水戸弘美 1999)<sup>(15)</sup>によれば8世紀第4四半期～9世紀第1四半期に位置付けられる。S T 6から他に出土している遺物も同時期のものが主体をなす。ただし、覆土から出土している16の土師器甕(赤焼土器)については、この時期の一群には入らない。

竪穴住居跡S T 1とS T 2の床面から時期を推定できる遺物は出土していないが、主体となる土器・主軸の方向から竪穴状遺構S T 6と同時期であると考えられる。ただしS T 2の土師器甕20は他の時期の所産である。S T 6の土師器甕16、S T 2の土師器甕20は、時期の判断が難しい遺物だが、1～3次調査で10世紀初頭の遺構群が検出されていることから、この時期のものが覆土内に混入したと考えられる。

掘立柱建物跡S B 65の柱穴は、2次調査区内のS B 2の柱穴と組み合い、同一の遺構であることが確認された。2次の報告<sup>(16)</sup>では中世とされている。

溝跡S D 7は2次調査区の15世紀頃の青磁碗が出土しているS D 124と3次調査区のS D 98と同一の溝跡である。同様にS D 9も2次調査区のS D 362と繋がる。またS D 9・11では出土遺物はないが、主軸の方向から2次調査区のS D 124と同じく15世紀頃のものと考えられる。

陥穴は3基検出された。いずれも底面に逆茂木を立てたと考えられるピットをもつ。出土遺物はなく時期は不明であるが、周辺には岩木A遺跡(前期)・岩木B遺跡(前・中期)などの縄文時代の遺跡が確認されており、関連する可能性がある。

4次調査でも、これまで通り古代の集落跡・中世の区画溝に開まれた集落跡が確認された。隣接する2・3次調査区の遺構とも関連している。また、初めて縄文時代と考えられる陥穴も検出された。遺物については8世紀第4四半期から9世紀第1四半期を中心に、10世紀初頭の土器・縄文時代の石器などが出土した。中世に位置付けられるような遺物の出土は無かつた。

## VII 四ツ塚遺跡の調査成果

四ツ塚遺跡の発掘調査は平成10年度から14年度にかけて継続して行われてきた。調査原因は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業である。調査は平成14年度の4次調査をもって終了する。なお報告書は逐次刊行されており、全部で1次調査から4次調査までの四冊の報告書が刊行されたことになる。

1次から3次調査の報告書に示された標高値は、誤認により実際の標高より2.75m高いことが、4次調査で明らかとなった。ここで訂正する。

総面積11,000m<sup>2</sup>の調査区からは多種多様の遺構が検出された。また時期も複数にわたる。本遺跡は寒河江川扇状地前縁部と、葉山南麓山地から続く大久保段丘の境界に位置しており、この遺跡の多様な内容も、異なる地形分類の境界に位置することに起因するものと考えられる。次に遺構の配置、主軸方向、出土遺物の検討を行い各時期ごとの遺構群のまとめを示す。

各次の調査で遺構・遺物に付した番号は、異なる年度の調査同士で重複することがある。そのためこの章では、遺構番号の後の括弧内の数字で何次の調査によるものかを示す。

また、1次から3次の調査の中で竪穴住居跡として報告されているものがあるが、いずれもカマドなどの施設を持たず、住居跡とは考えられないため、本文では竪穴状遺構として扱う。

遺構の主軸の振れは4次調査では平面直角座標系第X系のX軸に対する傾きを計測したが、1次から3次の調査では磁北をもとに計測している。本章で示す主軸の振れはすべて4次調査で行った方法で再計測した値を記載しているため、1～3次の報告書の記載と異なる場合がある。

### 縄文時代の遺構

四次調査で初めて縄文時代と考えられる陥穴がSK5・8・19（4次）の3基検出された。また、3次調査で検出されたSK113（3次）は、報告書では性格不明の土坑とされていたが、4次調査で検出された陥穴列の延長上に位置することから、遺構の形態も考慮に入れた上で陥穴とした。ただし、逆茂木を立てたと考えられるピットは見られない。全部で検出された陥穴は4基となる。

四ツ塚遺跡付近の地形は北西から南東へ下る傾斜地で、陥穴列は調査区の中でも標高の高い地点に、等高線に平行する配置で検出された。分布位置は大久保台地の縁辺部であり、先の寒河江川扇状地前縁部の湧水地へ集まる獲物を狙ったものといえる。これらの遺構群をⅠ期とする。

縄文時代の遺物は一次から四次調査を通じて、他時期の遺構の覆土中に散見されており、他の縄文時代の遺跡から混入したものと判断できる。付近には岩木A遺跡（中期）、岩木B遺跡（前・中期）などが存在している。

### 古代の遺構

奈良時代から平安時代にかけての遺構として竪穴住居跡 S T 1 (4次)・S T 2 (4次)、竪穴状遺構 S T 6 (4次)・S T 365 (2次)・S T 22 (3次)の5基が検出された。調査区の西半、傾斜地の比較的高い位置に分布しており、この時期の集落の広がりを示すものと考えられる。遺構の遺存状態は悪く、いずれも浅いことから、遺跡が削平されていなければ、集落はさらに西へと続いていると言える。また、これらの竪穴住居跡・竪穴状遺構の主軸の振れは北で西に6~22度の範囲に収まっている。出土遺物(第15~19図)は竪穴状遺構 S T 6 (4次)の床面から出土している須恵器壺(第17図、3)をはじめ、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期のものが主体である。この遺構群を同時期のものとして捉え、II期としておく。

他に出土遺物(第20図)から10世紀初頭と考えられる竪穴状遺構 S T 652 (2次)がある。この遺構の主軸の方向はN 8° Eである。この遺構以外に10世紀初頭のものとして報告された遺構はないが、掘立柱建物跡 S B 1 (1次)は主軸の振れが北で東に約1度で、S T 652 (2次)に近い。出土する遺物で明確に時期を示すものは見られないが、主軸の方位をもとに S T 652 (2次)に近い時期と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 4 (2次)は周囲に二重に溝跡を巡らすという特徴を持ち注目される。特別な意味を持つ遺構の可能性があるが、具体的な内容を示す証左は検出されていない。建物の周囲を巡る溝跡から出土する遺物から8世紀後半と報告されているが、主軸はN 9° Eを示し、やはり S T 652 (2次)に近い。出土遺物の示す年代は遺構の上限を示すものとして捉え、S T 652 (2次)と同じ時期として考えたい。

これらの遺構群は先に述べたII期の遺構群よりも南東の比較的低い斜面上に分布している。主軸の方位と遺構の分布から10世紀初頭の同時期のまとまりとして考え、III期とする。

### 中世の遺構

竪穴状遺構 S T 405・656・657・658・1031・1034・1038・1615 (1次)ではカマドなどの施設は検出されず、住居跡とは考えられない。これらの竪穴状遺構の主軸の振れはN 50~70° Wである。また S T 658 (1次)からは北宋錢(第21図)の「至道元寶」(行書)が出土している。初鋤年は995年だが、渡来錢が日本国内において広く流通するようになるのは中世に入ってからのことである。S T 658 (1次)付近に見られる竪穴状遺構群も主軸の振れ、遺構の状態から同様の時期と考えられている。

掘立柱建物跡 S B 1616 (1次)・S B 2 (2次)・S B 3 (2次)の主軸の振れもN 63~66° Wを示し、先の竪穴状遺構群に近いが、やはり明確に時期が判別できる遺物の出土ではなく、主軸の振れから、中世の所産と考えられている。他に竪穴状遺構群の付近に多数の柱穴と考えられる遺構が見られるが、これらの組み合わせを再検討することにより、さらに多くの掘立柱建物跡が検出される可能性がある。

溝跡 S D 555 (1次)、同じ溝跡で2次調査区で検出された溝跡 S D 959 (2次)、平行し

て検出された溝跡 S D1002（1次）と、同じく2次調査区内で検出された溝跡 S D124（2次）もやはり主軸の振れから、同じく中世のものと考えられる。S D124（2次）から15世紀頃のものと考えられる青磁碗（第22図）が出土している。この2条の溝跡は道路跡の側溝と考えられ、方位は溝跡の心々で、N50°Wである。幅は溝跡の心々間で平均4.2mである。この道路跡に直交する溝跡 S D1605（1次）・S D1606（1次）・S D1607（1次）・S D1610（1次）・S D312（2次）などが見られるが、やはり同時期とすべきであり、中世の集落の区画溝と考えられる。

これら中世の所産とされる遺構群の主軸の振れはN50～66°Wの範囲内にある。他の時期の遺構でこの方位に近いものは見られず、一つの時期的なまとまりとして捉えれば、15世紀頃の四ツ塚遺跡の集落は、N50～66°Wという一定の方角に合わせて造られたと考えられる。これら中世の遺構群をIV期とする。また、これら中世の遺構群の主体は、II期・III期の遺構群よりもさらに南東側の標高の低い面に分布するようになる。

井戸跡は主に調査区の最も南東側、中世の遺構群が数多く見られる地点付近に集中する。この井戸跡が多く見られる場所は、先に述べた寒河江川扇状地前縁部であり、地下水が豊富で、井戸を構築するのに適した場所である。遺物は土師器・須恵器が少量出土しているが、古代、あるいは中世のどちらに当たられるか判然としない。ただし、井戸跡 S E1465（1次）では915年に降灰の記録が残る十和田aテフラが検出されており、B類の時期に入る。1次調査の報告書では溝跡 S D555（1次）を切っているとして、S D555（1次）を915年以前としている。その後、2次調査で同時期の溝跡と考えられる S D124（2次）から先に述べた15世紀の青磁碗が出土するに及び、1次調査での S D555（1次）と S E1465（1次）の新旧関係は再考を迫られた。その結果、2次調査の報告では新旧が逆転し、S E1465（1次）を古代、S D555（1次）は青磁碗の年代をもとに中世のものとして報告されたのである。今回の報告では2次調査の報告書での、溝跡の覆土は井戸跡の覆土中に含まれるという見解<sup>(17)</sup>を探り、S D555（1次）を中世として考える。

### まとめ

四ツ塚遺跡は縄文時代、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期、10世紀初頭、中世の複数の時代にまたがって営まれた遺跡である。出土する遺物は十分な資料とは言えず、遺跡の内容を把握するのは困難だが、主な遺構の主軸の方位、地形区分上の分布などから、各時期の遺構をまとめ、遺構の変遷を考察した。最後にその要約を記す。

I期は縄文時代の陥穴。調査区の北西側、台地の縁辺部で、標高の高い地点に位置する。4基確認され、等高線に沿うように列状に配置される。

II期は8世紀第4四半期から9世紀第1四半期とした。調査区の西側、標高の高い地点に、主軸がN6～22°Wに振れる遺構群。竪穴住居跡、竪穴状遺構などからなる集落跡である。

III期は10世紀初頭で、II期より一段低い位置に分布し、主軸がN1～9°Eに振れる遺構群。竪穴状遺構、掘立柱建物跡、十和田aテフラが検出された井戸跡 S E1465（1次）

などからなる集落跡である。

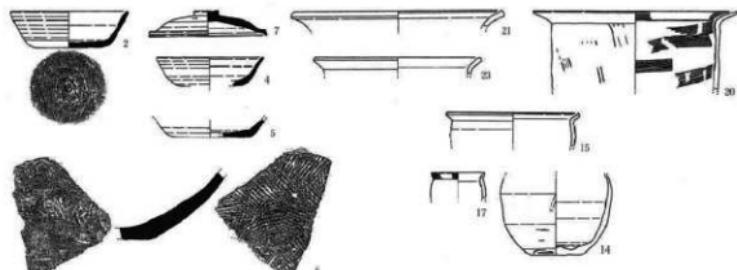
IV期は中世で、主に調査区内でも最も低い位置に分布する。主軸の振れはN50°W～70°Wである。竪穴状遺構、掘立柱建物跡、道路跡、そして道路跡と直交する区画溝などからなる集落跡である。

井戸跡については、平面形が円形であり、主軸が不明であることと、分布が湧水地に限定されることから、S E 1465（1次）以外は特に分類しなかった。

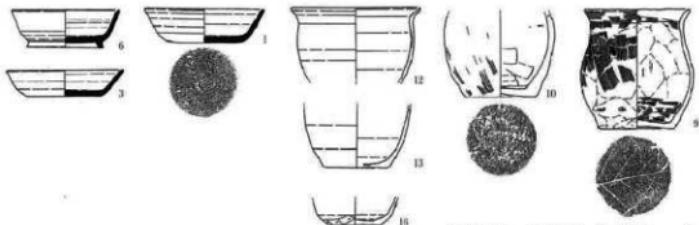
この分析では、古代から中世の集落は低地へ向かって降りていく状況が見える。また、各時期の遺構群はそれぞれ一つの決まった方角にある程度規制されて構築されていることも分った。つまり、先に構築された遺構の方位に規制されて新しい遺構が構築されるためか、あるいは最初から一つの方位に揃えて集落を造ったかのどちらかと考えて良いだろう。方角、配置などさまざまに制約を受けながら集落は構成されるが、さらに規模、形態にも同様に制約を受けていたことも考えられる。今後は四ツ塚遺跡をはじめ他の遺跡でも更なる検討を行い、集落の構成、消長を考えていく必要がある。



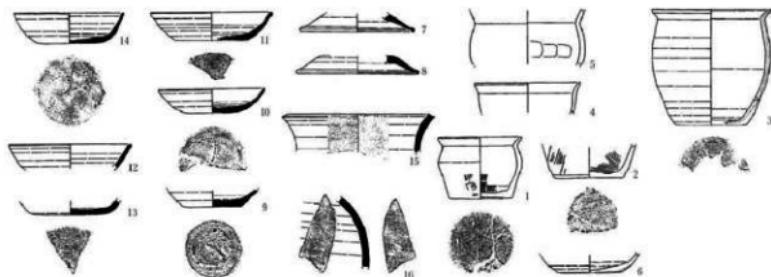
第15図 ST 1 (4次) 1:6



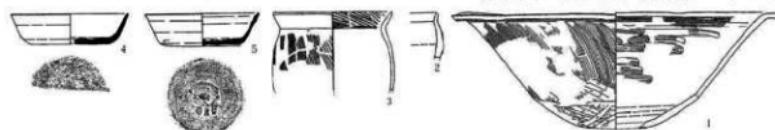
第16図 ST 2 (4次) 1:6



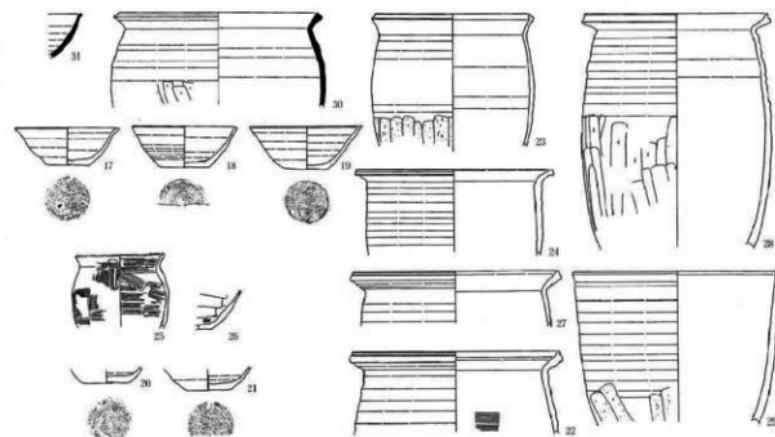
第17図 ST 6 (4次) 1:6



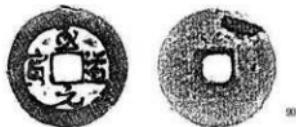
第18図 ST 365 (2次) 1 : 6



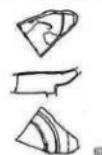
第19図 ST 22 (3次) 1 : 6



第20図 ST 652 (2次) 1 : 6



第21図 ST 658 (1次) 1 : 1



第22図 SD 124 (2次) 1 : 4

## 註

- 1 a 高橋敏他 1999 「四ツ塚遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第70集)  
財団法人山形県埋蔵文化財センター
- b岡部 博・豊野潤子 2000 「四ツ塚遺跡第2次発掘調査報告書」  
(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第74集)  
財団法人山形県埋蔵文化財センター
- c 岡部 博・豊野潤子 2001 「四ツ塚遺跡第3次発掘調査報告書」  
(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第90集)  
財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 2 今田史明 2001 「花ノ木遺跡発掘調査報告書」(河北町埋蔵文化財調査報告書第4集)  
河北町教育委員会
- 3 長橋 至 1981 「下根遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第39集)  
山形県教育委員会
- 4 佐藤庄一・安部実 1980 「熊野台遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第31集)  
山形県教育委員会
- 5 野川主計他 1981 「畠中（一の坪）遺跡発掘調査報告書」(河北町埋蔵文化財調査報告書第2集)  
河北町教育委員会
- 6 長橋 至 1986 「不動木遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第100集)  
山形県教育委員会
- 7 野川主計・高橋郁夫 1982 「月山堂遺跡発掘調査報告書」(河北町埋蔵文化財調査報告書第3集)  
河北町教育委員会
- 8 野川主計他 1980 「溝延馬場遺跡発掘調査報告書」(河北町埋蔵文化財調査報告書第1集)  
河北町教育委員会
- 9 前掲註4文献、p.62
- 10 阿部明彦他 1979 「山辺条里遺跡」(山形県埋蔵文化財調査報告書第22集) 山形県教育委員会
- 11 山形県教育委員会 1973 「東根市西北平塙部の遺跡群—古墳から条里へ—」
- 12 佐藤庄一・保角里志 1982 「地下に埋もれていた条里遺構」『山形県史 第一巻 原始・古代・中世編』  
p.365～p.369 山形県
- 13 a 柏倉充吉・伊藤 忍 1970 「平野山古窯跡群—山形県における古代窯業遺跡の研究」寒河江市教育委員会  
b 宇野修平他 1984 「平野山窯跡群第14地点遺跡発掘調査報告書」  
(寒河江市埋蔵文化財報告書第3集) 寒河江市教育委員会
- c 佐藤庄一・須賀井明子 1998 「平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書」  
(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集)  
財団法人山形県埋蔵文化財センター
- d 須賀井新人他 1992 「平野山古窯跡群第12地点遺跡発掘調査報告書」  
(山形県埋蔵文化財調査報告書第178集) 山形県教育委員会
- 14 註1 b文献、p.33 第17図 遺物実測図(3) 39
- 15 阿部明彦・水戸弘美 1999 「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』p.63～p.112  
古代城柵官衙遺跡検討会
- 16 註1 b文献、p.12
- 17 註1 b文献、p.21

ふりがな	よつづかいせきだいよじはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	四ツ塚遺跡第4次発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第110集						
編著者名	水戸部秀樹 渋谷純子						
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発行年月日	2002年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
よつづかいせき 四ツ塚遺跡	山形県 西村山郡 河北町 大字吉田 字馬場 164他	6321 市町村 遺跡番号	481 38度 26分 43秒	140度 18分 49秒	20010514 ～ 20010614	1,500	山形県立 教護施設 みやま荘 改築整備 事業
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
狩猟場	縄文時代	陥穴		陥穴の底面に逆茂木を立てたと見られるピットを検出。			
集落跡	奈良時代 平安時代	竪穴住居跡 竪穴状遺構	須恵器(环・蓋・甕) 土師器(环・甕) 石器				
集落跡	中世	掘立柱建物跡 溝跡		2次調査の掘立柱建物跡の続きと見られる柱穴を検出。 2・3次調査の続きとなる溝跡を検出。			

Y = -45,400

X = -172,860

Y = -45,250



第23図 四ツ塚遺跡遺構配置図

図 版



四ツ塚遺跡調査区(1次～4次の空中写真を合成、右が北)

図版2



第4次調査区(南東から)



竪穴住居跡ST 1(南から)



カマド(ST 1)



整穴住居跡 S T 2 (北から)



カマド (S T 2)



竪穴状遺構 S T 6 (南から)



遺物出土状況 (S T 6)



溝跡 S D 7・9 (東から)



S D 7・S K 39断面b-b' (南西から)

S D 7・9断面e-e' (東から)

図版4



溝跡 S D11断面a-a' (西から)



溝跡 S D11断面c-c' (東から)



陷穴 SK 5 (北から)



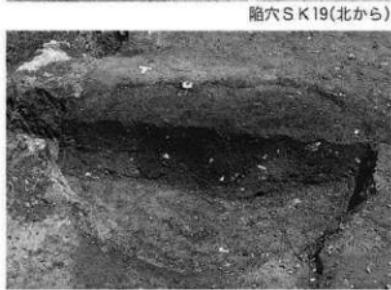
陷穴 SK 8 (南東から)



陷穴 SK 19(北から)



土坑 SK 4・柱穴 SP 50-51(北から)



土坑 SK 27断面(南から)



柱穴 SP 52(北から)



4次調査出土土器

1

2



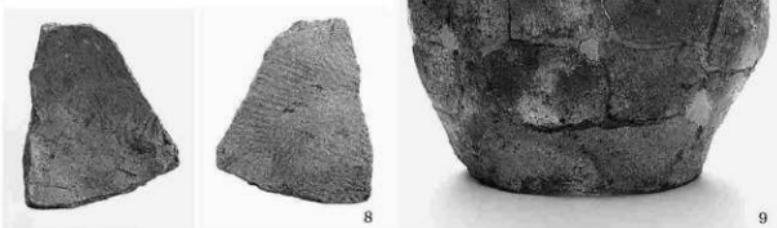
3

4



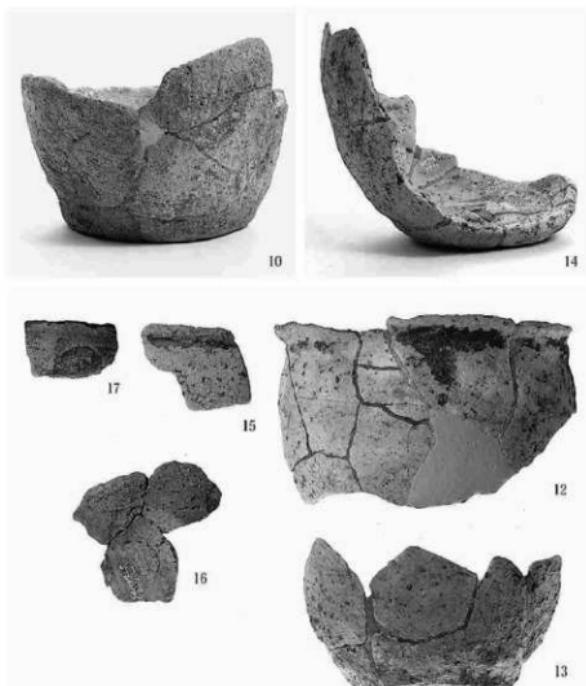
7

9

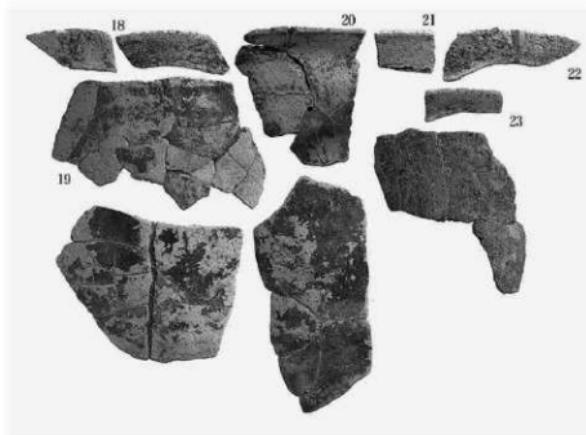


8

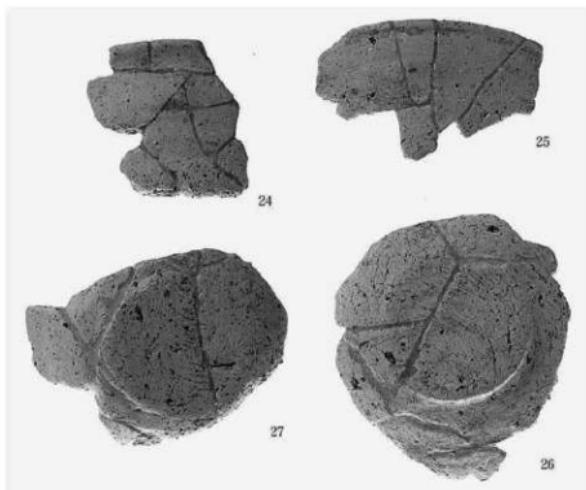
圖版6



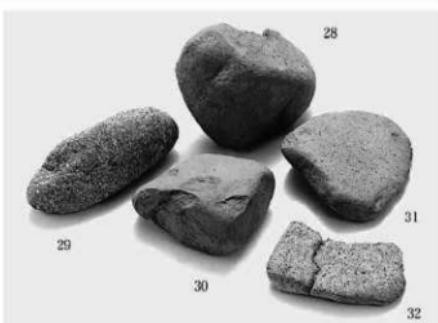
甕(赤燒土器)



長頸甕



环(赤烧土器)



カマド周辺出土の環



绳文时代の石器

図版8

1～3次調査の主な遺構(詳細は各次の調査報告書参照)



竪穴状遺構 S T 365 2次(南から)



竪穴状遺構 S T 22 3次(北から)



竪穴状遺構 S T 652 2次(東から)



掘立柱建物跡 S B 1 1次(南から)



掘立柱建物跡 S B 4・溝跡 S D 520 2次(北から)



竪穴状遺構 S T 405・656・657・658 1次(南から)



S T 1031・1034・1038・1615 1次(南から)



掘立柱建物跡 S B 2 2次(南東から)



掘立柱建物跡 S B 3 2次(南西から)



溝跡 S D124・S D959 2次(南東から)



S D123 2次(北から)

S D98 3次(南から)



溝跡 S D1002・S D555 1次(南東から)

S B 2 の柱穴は4次調査区でも検出された。

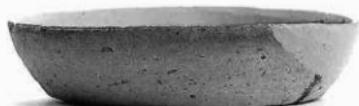
(第7図参照)

溝跡 S D124と S D1002、S D959と S D555は調査区を越えて確認された同一の溝跡。道路遺構と考えられる。

溝跡 S D123と S D98も間に4次調査区の S D 7を挟んで確認された同一の溝跡。

図版10

1～3次調査の主要な遺物(詳細は各次の調査報告書参照)

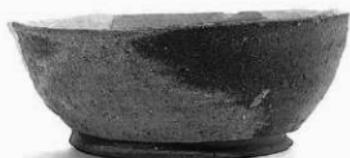


78(2次)



81(2次)

坏



9(1次)



16(1次)



41(2次)



42(2次)

高台付坏



32(2次)



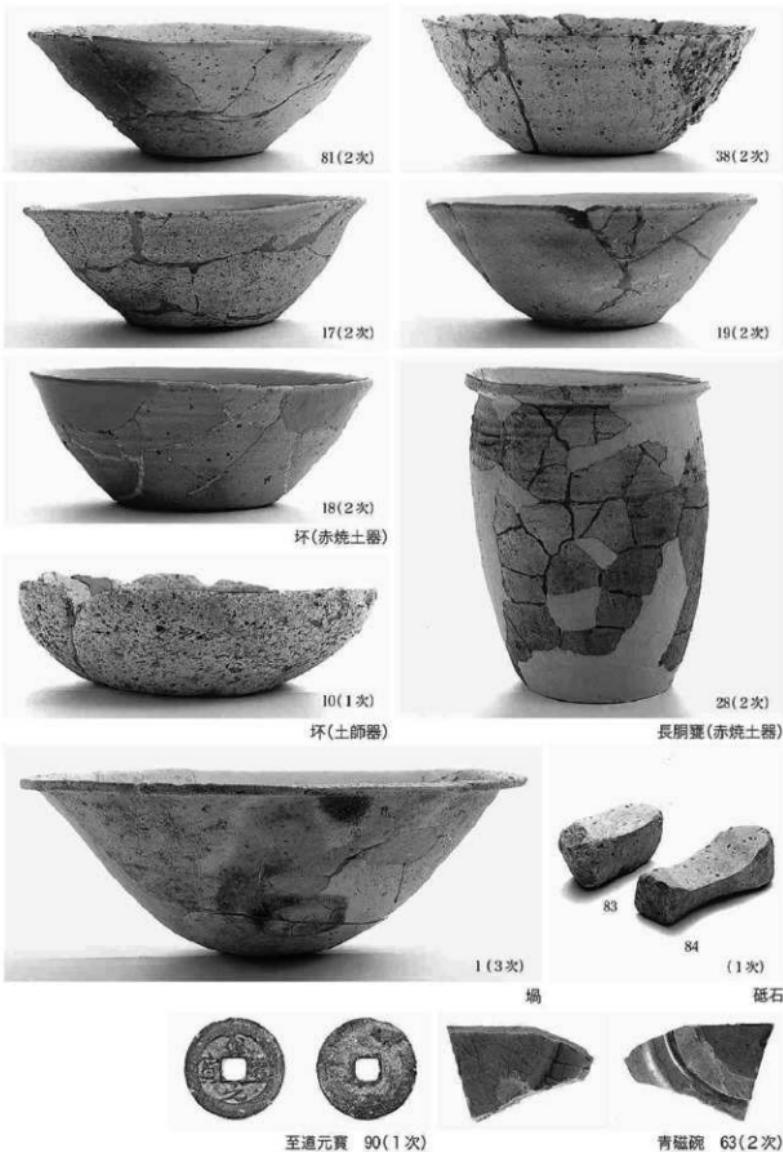
63(1次)



33(2次)

黒色土器(坏、塊)

長頭壺



---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第110集

よつづか  
四ツ塚遺跡第4次発掘調査報告書

2002年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 藤庄印刷株式会社

---